


 書評

広瀬徹也，内海 健 編

うつ病論の現在

精緻な臨床をめざして

大森健一

私が精神科医になった1960年代は躁うつ病に対する臨床精神医学的、精神病理学的研究も、テレンバッハのメランコリー親和型に触発された病前性格論，あるいは発病状況論や疾病構造論などで結構盛んであった。森山公夫先生，笠原嘉先生，木村敏先生などの論文に大いに刺激を受けたものである。

その後躁うつ病に対する神経伝達をめぐる研究が盛んになった。ある先輩に「精神病理をやっている君には悪いけど，うつ病はわかっちゃったよ」とからかわれたのを記憶している。その後1970年代の後半から，当時の華やかな精神分裂病論を意識する一方で，このような生物学的精神医学界の動向を背景に「躁うつ病の精神病理」シリーズが計5巻，1987年まで刊行されたが，その後は途絶えてしまった。

本書は18年ぶりの類書の刊行であると編者の1人，広瀬先生は述べ，本書発刊の意義を次のように記述している。「この18年間の気分障害領域の進歩はSSRI，SNRIの出現による薬物療法や無けいれん性通電療法の普及などの生物学的治療面で目覚しく，その分臨床精神病理の進歩が目立たなかった印象があるが，目立たないだけで，着実な進歩があったことを本書から読み取って頂けることを確信している」というわけである。まことに同感である。

そのようなわけで，本書は2003年7月に「躁うつ病の精神病理」同様1泊で行われたワークショップでの精神科医たちの発表を論文としたものである。そのタイトルと著者を紹介しておこう。

「うつ病の行動遺伝学的構造」(神庭重信)，

「うつ病の症状構成—制止，不安・焦燥，自殺念慮を軸として」(阿部隆明)，「『逃避型抑うつ』再考」(広瀬徹也)，「うつ病と最も関連するパーソナリティ特徴は？—当世うつ病病前性格事情(坂戸 薫・坂戸美和子)「気分障害の辺縁領域—構造主義的視点からの考察」(津田均)，「存在の耐えがたき空虚—ポスト・メランコリー型の精神病理」(内海 健)，「回復論の視点からみたうつ病治療」(八木剛平)，「気分障害の精神分析—無能力感と境界形成をめぐる」(狩野力八郎)，特別寄稿として「診察室での軽症うつ病の臨床研究」(笠原 嘉)などである。

本書には，行動遺伝学などの生物学的研究から症状論，病前性格論，うつ病構造論，精神分析論，そして治療論と広くうつ病全体をカバーできる論述が内包され，またそれぞれが，そのタイトルからも推察できるように，長年に及ぶ自己の見解を日々の営為の中で発展させた考察であり，惹きつけられる。

最近の20年間でも我々の生きる社会はさまざまな点で驚くほど変化した。その影響から患者も治療者も逃れることはできない。その時代性，社会状況を反映してうつ病の病態も変化したし，それに対する治療も変化を要請されている。本書はそれに対して応えようとする努力の結晶とも言える内容を含んでおり，うつ病診療に携わる人々にはぜひ一読をと，お勧めしたい。

(滝澤病院)

●A5判 224頁 2005 定価3,780円(本体3,600円+税) 星和書店